

# 被災地の現状と調査の視点を探る

## — 鑑定人はいかに動いたか — (上)

震度7を2回記録した熊本地震。多くの木造住宅が2度の強い揺れに耐え切れず倒壊した。特に、益城町周辺では押しつぶされて屋根だけが残る惨状も至る所で見受けられる。損保協会によれば、熊本地震による地震保険金支払額は約3285億円(6月27日現在)となっている。保険金支払いに向けたスピーディーな対応が求められる中、損保鑑定人はいかに動いたのか。今回、地震保険の調査で現地に入った日本アイラック(東京都新宿区、国原秀則社長)の協力を得て、鑑定人の資格を持つ一級建築士の渡邊雅治氏に同行。被災地の現状と鑑定業務の対応を振り返った。

### 小雨の益城町へ

る熊本空港を後に、渡邊氏はとタクシーで益城町へ入った。天候は小雨。道内を務めてくれたのは、地元で長年、個人タクシーを経営し、幾度も地震保険の鑑定調査をドライバーの

## 記者の視点から

### 熊本地震 第2弾

6月19日、損害が一部残った。天候は小雨。道内を務めてくれたのは、地元で長年、個人タクシーを経営し、幾度も地震保険の鑑定調査をドライバーの



①この地域では、竹を縛り縫った木舞(小舞)を柱と梁の間に下地を作り、土を塗り、しっくい仕上りした土壁の住宅も多い。筋交いはなく、地震の揺れに対しては弱い。②1階部分が座屈した住宅③波打つ路面



### 年齢、ライフスタイル異なる契約者

## 「被災者に寄り添う調査を」

日本アイラック鑑定人／一級建築士 渡邊雅治氏

乗車中に資料の検討や整理ができ、鑑定人が調査に集中できるメリットもある。益城町入りは地震後2

の住所が古く、ナビの住所が合わないというケースもある。地元のタクシードライバーは30分程度で到着できる現場に、1時間

の強い揺れで緩み、負荷に耐えられず、一気に建物が崩れたようだ」と分析する。台風災害に備えるために重く造られた構

成の時間も必要になることから、1日4件程度が理想的だと指摘。「鑑定人のところで書類が滞ってしまえば、結局、契約者への保険金支払いが遅れてしまいかねない。食べ物も、口の中にたくさん入れて飲み込もうとす

また、相手の年齢などによって話し方も変える思いやりも欠かせない。高齢者と若い単身者では同じトーンでは話せないからだ。「相手は間違いなく被災者。役に立つ保険でありたいから、被災者に寄り添うような調査を心掛けている」と言う。



④1階部分が座屈した住宅⑤波打つ路面

### 適量をしっかりと。量より質の鑑定を

日本アイラックでは地震後の4月17日に第1陣が被災地に到着。渡邊氏自身も24日に熊本入りし、その後、ホテルを転々としながら現地にとどまっている。鑑定業務の流れは、契約者からの事故受けに基づき、保険会社が書類などを作成して鑑定人チームに渡す。保険会社が契約者への訪問日時を確定する場合もあれば、鑑定人自身が直接アポ取りをするケースも

### 被害を細かく掘り起こす

実際の鑑定業務に当たっては、契約者の年齢やライフスタイルを考慮して話を聞くことを心掛けていくという。例えば、家財の調査ではさまざまな生活用動産の被害について聞き取るが、高齢者宅では仏壇や神棚、子どものいる家庭では子どもの情操教育のためのピアノ、若い世帯主では、パソコンや音楽機器といったものもある。また、単にピアノといっても電子オルガンなどさまざまな種類があり、パソコンについてもスクリーンやプリンターなどの周辺機器がある。年齢やライフスタイルによって所有している家財が異なるだけに、単に家具や食器の被害といった大枠の聞き方だけでは被害を見落としかねない。契約者が忘れていたような家財の被害も、同様の状況を招くことが想定できる。

熊本地震を鑑定人の立場から振り返ると、拠点となる市内が損害を受けたことの影響が大きいと渡邊氏は述懐する。態勢を整えるための時間と場所の確保に手間取り、当初、ワンルームに9人が入って作業する状況が続いたという。このことは、他の都市で直下地震が発生したような場合にも、同様の状況を招くことが想定できる。

乗車中に資料の検討や整理ができ、鑑定人が調査に集中できるメリットもある。益城町入りは地震後2

の強い揺れで緩み、負荷に耐えられず、一気に建物が崩れたようだ」と分析する。台風災害に備えるために重く造られた構

成の時間も必要になることから、1日4件程度が理想的だと指摘。「鑑定人のところで書類が滞ってしまえば、結局、契約者への保険金支払いが遅れてしまいかねない。食べ物も、口の中にたくさん入れて飲み込もうとす

また、相手の年齢などによって話し方も変える思いやりも欠かせない。高齢者と若い単身者では同じトーンでは話せないからだ。「相手は間違いなく被災者。役に立つ保険でありたいから、被災者に寄り添うような調査を心掛けている」と言う。

(記者・森隆/防災士)